

2016 年春学期レポート  
日本財団聴覚障害者海外奨学金事業

第 9 期生 瀧澤 泉

去年の秋学期に再度に入学申請をし、2016 年春学期から国際開発学部の入学認定を頂いた。春学期から本格的に大学院生として一步踏み出せた。

【春学期(履修クラス)】

- ECO 714: Economic Development (経済開発)
- ECO 725: Micropolitics of Development (開発のマイクロ政治)
- IDP 772: International Development with People with Disabilities in Developing Countries (開発途上国にいる身体障がい者たちの国際開発)
- COU 731: SIMSOC: Simulated Society (シミュレーション社会)

ECO 714: Economic Development (経済開発)

時刻: 毎週火・木曜 2 時—3 時 20 分 (1 時間 20 分)

教授: Jeffrey B. Miller

送金と移住者と関係性

2013 年の調査によると発展途上国から他の発展途上国へ移った異国移住者が 38%だったが、世界銀行(2015 年 12 月 18 日)によると移住者が発展途上国から先進国へ移ったのは 2013 年のケースと同じ位 34%だった。それに比較すると資本、取引、投資、知識、技術などが発達しているのではないかと語っている。その原因で送金が開発援助の量より 3 倍以上もあることが明らかになっている。特に移住者の多い国がインド、メキシコ、ロシア、中国、バングラデシュ、パキスタン、フィリピン、アフガニスタン、ウクライナ、イギリスなど。確かに労働率が高い街へ移動する人々が増えているのは真実だが、そこで人口が増えたり、経済が良くなったりする一方で、移った人々がもともと住んでいた国あるいは街の、人口が減る、または労働者が少なくなることで経済が悪くなって

いる状況に至ることが問題(つまり、貧困と豊富の差が生まれてしまうわけです)。もし、異国で国際開発に関する団体で身体障害者の人々が自立できるようにするために社会に参加する中、お金はどこへ行くのか、何のためにあるのかを注意して考えなければならない。

### ECO 725: Micropolitics of Development(開発のマイクロ政治)

時刻: 毎週水曜日 1時—3時50分 (2時間50分)

教授: Audrey Cooper

「マイクロ政治」とはどんなイメージを持つかとクラスの最初に個人それぞれの考え方を議論しあった。つまり、もし自分自身が異国に行って国際機関や組織に関する仕事を与えられた場合、国それぞれに必要な支援をどこまでやるべきなのか調べ、分析し、重要なことは何かと明らかになった上で(論文を書く或いはデータを見つけるなど)行動しなければならない。それが「マイクロ政治」という。

著者の Jackson(ジャクソン)の「THE GLOBALIZERS: Development Workers in Action」(グローバル化させる人: 労働者たちの行動上の開発)

「Globalizer」という言葉は辞書には載っておらず、そのまま読むと「国際化とさせる人」となってしまおうのですが、ジャクソンによると「開発は援助機関が『必要な』支援を求められている国に多国籍企業の増加を促進する政治的影響力を及ぼす、それが『産業』だ」と説明されている。そのため資本主義の成長と変革を調べて、その最新の形に非常に気配りする必要がある。

#### グローバルパワー(Global Power)

- ◇ Intervention/Insertion (干渉/導入)
- ◇ Surveillance (見張り、監督)
- ◇ Agenda Setting (課題の背景)
- ◇ Garnering Consent (同意を得る)

#### グローバル化の特徴(Characteristics of Globalization)

1. 新しい創造・伝統・政治・経済・文化・物理的環境を既存の社会的ネットワークと活動を広める。

2. 社会関係、活動と相互依存の拡大。
3. 社会的交換と活動の増大と拡大。
4. 人間の意識と認識を変えること。

LGBT(レズビアン “女性同性愛者”、ゲイ “男性同性愛者”、バイセクシュアル “両性愛者”、トランスジェンダーなど)

異国の宗教側の見方や更なるマイノリティーの立場など問題が挙げられています。やはり、人間の意識と認識は歴史的に関わり、固定観念として残ってしまった状況を分析しなければならなかった。

最終的に大きな課題であるプロジェクトを個人別々に実際に起きている問題を論文に 20 ページ位に書き上げた。データを集め、背景問題を分析して「原因」を探った中で、「意識と認識」を把握しなければ解決し難い。大事なことは「パワー(権力)は誰が持っているのか? どこにあるのか?」を考えなければならないことである。

IDP 772: International Development with People with Disabilities in Developing Countries (開発途上国にいる身体障がい者たちの国際開発)

時刻: 毎週月曜日 1時—3時 50分 (2時間 50分)

教授: Arlinda Boland

去年度秋学期に受けた IDP 770(国際開発学の入門)は専門語や知識を深め、世界中に活動している団体や組織、活動の歴史や分野など国際開発学の全体でも幅広く学んだが、今回受けたこのクラスは国際機関(組織)や国連総会の報告書や法律に身体障がい者がどう関わるのかを中心に分析する内容だった。

**世界保健機関(WHO)とは?**

途上国の健康システム、生活支援、エイズや流行病の診察、企業サービスなどそれぞれ最高健康水準を達することを目標に 150ヶ国に 7000人位のスタッフが活動。

身体障害者たちに対するアクセスやサービスも含めて活動している方がいるが、聴覚障がい者(ろう者)たちに必要なアクセスや知識・サービスがまだ満たされていない状況。一番問題がろう者たちの「第一言語」に関わると知った。確

かに健康保健機関(WHO)はろう者たちには手話通訳者が必要であると書かれてあったが、ほとんどの国は「手話を『言語』として」認めていないということが課題に至る。医療の団体からろう者たちに対して「耳を治療することで自立できる」という見方が今でも残されている。地域の言語を尊敬し、ろうコミュニティを権利やサービスを改善するために調査しなければならない。したがって、分かりやすいポイントは下記に示している。

### Conceptual Models of Disability (障害の概念モデル)

Medical Model (医療モデル)

Rehabilitation Model (リハビリテーションモデル)

Social/Cultural Model (社会・文化モデル)

先ほどに話したように、主に身体障がい者たちに対し医療モデルに専念することが多い。そのため、ろう者たちはコミュニケーションできる環境が非常に少なく、自立しづらい面が現状としてある。

### 障害者権利条約(Convention on the Rights of Persons with Disabilities “CRPD”)とは？

2006年12月13日に国連総会において障害者権利条約(CRPD)を「手話は言語である」と定義した。その後、日本で2014年に国連総会と障害者権利条約(CRPD)を寄託したと明確になっている。

しかしながら、CRPDはAmericans with Disabilities Act of 1990 (ADA)「アメリカ障がい者法」のモデルから作られたものであり、今まで審議会から投票数が超えなかったため認められずに至った。今年の秋にまた改めて投票するそう。原因は幾つかあるのだが、他の幾つかの問題に対する条件を優先し、CRPDを批准するのは不要だという視線があるのだそう。CRPDは身体障がい者に”Empower”「権利を与える」こと、アクセスを保証することが重要であるという声が今でも挙げられている。

### リソースフィルム

ろう児のための絵本のリソースを集めて、ギャロデット大学のウェブサイトで作りました。リソースは本、資料、ビデオ、プロジェクトなど意外と30種類

までに集めなければならなかった。目標は日本にあるリソースを中心に集め、もし情報が足りない、或はデータがない場合はアジアに良い情報などを探って追加した。リソースを集めた時、改めて日本でも絵本の読み聞かせを励ましているスタッフたちや絵本が大好きなろう児たちが沢山いて嬉しい気持ちになった。

### COU 731: SIMSOC: Simulated Society (シミュレーション社会)

時刻: 2月5—7日(3日間)

教授: Cheryl Wu

このクラスは一単位だが、必修科目のため受けなければならなかった。三日間の集中講義(というよりアクティブ講義みたいな内容)という形だった。シミュレーション社会とは、簡単に言えば実際に起きている社会と同じ状況をコピーしたゲームみたいな内容であり、まず四つ(赤、黄、青、緑)チームにそれぞれのチームに任務、或は人類の立場が当日になるまで誰も知らないまま2月5日(金)~7日(日)の三日間に体験した。

自分は黄チームに入り、**Human Service** (福祉)の任務を与えられた。一日に八時間の間に建物から出られずに、集団で活動する「セッション」を一つ一つに通過するたびに仕事の効力による収入が入ってくる。様々なルールがテキストに書かれていたが、目的や重要点が曖昧のためなかなか内容が掴めずにあっという間に二日間が終わった。

三日目はそれぞれのチームに集まり、経験した上で意見や感想などをディスカッションして発表した。その日もやはり曖昧な成果に至った。詳細内容を公開するとゲームの意味がなくなるため禁じられているが、そのクラスは国際開発学部に関わる利益は少ししか残らなかったように感じたのが正直の気持ち。

今、分かる事は異なる経験をしている人と共に仕事すると違った視点が出てくる中でどう対応するか考える必要がある。短時間の間、どちらの仕事を優先すべきなのか、どう行動していく必要があるのか議論し合うことで改善できるようになるかもしれない。課題はろう者たち同士に理解し合えるコミュニケーションは手話だが、それぞれの人に論理的にぶつかり合うことがよくあると知った。つまり、人々は「言語」、「教育」、「経済」、「政治」に様々な論点が重なっているとわかる。全てが正しいとは言わず、共に働く時に互いに違

った考え方や立場から生まれる差を減らすために相手の事を「受け止めて」行動することはとても難しい事なのだ。ろう者の中でも多様性を持っているため挑戦的だが、リーダーシップを育てるためにはそれぞれの自分のアイデンティティを知る事、チームワークの組織を高めることが出来ることで自立できるようになるのではないか。

春学期は私にとって濃厚な専門用語や知識を深めることができた。そのため、将来に関して自分がどうすべきか、どんな立場に立つべきなのかを分析するようになった。今、思うことは団体や経験者など様々な人とネットワークを広めることが必要であり、自分が国に対する価値観を理解し深めることが重要であると感じた学期だった。将来に向けて、少しずつ準備を始めようとしている。